

【論文】

# 鑑賞者への意識を重視した パネルシアター発表のための学習における 学生の活動過程に関する研究

大野木 位行・中野 圭子・黒木 晶・山崎 雅史

## 1. はじめに

1973年に古宇田亮順がパネルシアターという表現方法、換言すれば幼児・児童への視覚教材の提示方法を創案してからおよそ半世紀が過ぎた。パネルシアターについて藤田(2013)は、「フランネルをはったパネル板に不織布でできた絵人形を貼ったり外したりして話す絵ばなしや歌あそびなどを展開して行う表現方法(p.191)」と述べている。今では保育の現場に広く普及し、大学における保育士養成・幼稚園教員養成課程においても学生の創意工夫が様々に凝らされる格好の実技教材となっているパネルシアターであるが、創案された当初から材料や形状をほとんど変えることなく演じられてきた。実技を学ぶ大学教材として様々な題材がある中で、学生自身が“保育者”であることをより強く意識して取り組める題材としてはパネルシアターが特に優れたものではないかと考える。それは、造形的な見せ方や演じ方の面白さ、楽しさゆえに教育的な学びが効果的に得られること、またこれに対し、幼児の学びを造形活動を通じて可能にする手立てとしては、幼児には製作が難しく保育者でなければ作り得ない部分が多く、演じる際には見る側を強く意識せざるを得ない構造上の特質がある点など、学生に対して保育者としての自覚を促しやすい題材であることに因る。

本研究は、上記のような特質を持つパネルシアターを、本稿の上梓の後に開催される大学祭に来場する幼児・児童に対して演じるために、学生が自ら内容を構想し、製作し、発表する一連の行程を保育の複数領域の視点から観察し学生の活動過程の考察を試みるものである。日常の授業時の学習では、学生が強い目的意識をもって取り組むことが決して容易ではない中で、これにより「学生が具体的他者を想定して保育の表現領域の実技に取り組み、実際に鑑賞者として相対する幼児・児童・保護者に向けて演じることを想定することで、学生が授業に臨む意欲や緊張感、発揮される種々の能力を高めるのではないか」という期待に対する成果を実地で検証したい。

## 2. 研究方法

### (1) 対象者

2025年度1学期に開講され、領域に関する科目のうち専任教員が担当する「子どもと健康」「子どもと人間関係」「子どもと表現（音楽）」「子どもと表現（造形）」を履修する32名であった。

### (2) 活動の概要

保育の場で行われる視聴覚教材を用いた実践を想定し、グループでパネルシアターの製作から発表までを行った。パネルシアター実践は、ストーリーを覚える・演じる・舞台（パネル）を活かして絵人形の操作をするなど、複数のタスクをこなしながら行う特徴がある。また、子どもへの問いかけなどやりとりを楽しみながら行うことを想定するため、繰り返し練習が必要である。

2024年度は、学生個人での学びの深まりを期待して個々での製作や発表を行ったが、2025年度は、学生間で意見を出し合い、協力して活動する中での気づきを重視することとした。グループ構成は、1グループ4名を中心とした8グループであった。10月の大学祭で子どもたちの前で実践することを目標とし、4月末～7月の期間に、技術面の学習、題材選定、製作、台本作り、発表を行った。授業内で完成しなかった場合は、授業外の時間を使って発表までに完成させた。題材については、修得過程に差が出ないように、絵本などのストーリーのあるものを選ぶよう履修者へ伝えた。活動ごとにグループ内で進捗状況を確認し、発表後には、振り返りシートを用いてこれまでの活動を振り返る機会を設けた。なお、絵人形製作については、全体の振り返りとは別に学生個々での製作に関する工夫点や反省点を中心とした振り返りを求めた。それは、製作が各グループとしては基本的な考え方を一にしても、作業としては個々に担う場面が多く、特に一人ひとりの学生が感覚として捉えたことは固有のものであり個別に表すことで記述しやすくなるからである。

### (3) 発表後の振り返りシートの内容

個人及びグループの振り返りシートの内容は、1. 工夫したこと・頑張ったこと、2. 大学祭に向けた改善点、3. 他グループの良かったこと、4. 題材選びで意識したこと、5. 子どもたちに伝えたかったこと、6. 台本の工夫、7. 発表の工夫、8. 役割分担の8項目であった。グループ発表の評価については、1. 人数に合わせた適切な役割分担ができたか、2. 絵人形を動かす動作（パネル板上の使い方）が適切にできたか、3. 声色や声量を適切に表現できたか、4. 上演が円滑に進められたかの4点を4段階（できた・少しできた・あまりできなかった・できなかった）で尋ねた。

#### (4) 倫理的配慮

学生には、授業での振り返りではあるが、調査に使用する可能性があることをあらかじめ説明した。研究協力については任意であり、協力したくない場合はその旨を「不可」と振り返りシートに記しておくこと、成績と一切関係がないこと、結果は統計的に処理され、個人が特定されることのないことを説明し、同意を得たうえで実施した。

### 3. 事例検討

学生の活動過程での気づきについて、題材選定、絵人形の製作過程、台本作り、発表の視点から検討した。表1は、8グループが選んだ絵本の一覧である。

表1 選定した絵本

書名	著者	出版社	発行年
おむすびころりん	作：松谷みよ子 絵：長野ヒデ子	童心社	2006
くまのこうちょうせんせい	作：こんの ひとみ 絵：いもと ようこ	金の星社	2004
くれよんのくろくん	作・絵：なかや みわ	童心社	2001
さわってごらん！よるの星	作：クリスティ・マシソン 訳：大友 剛	ひさかたチャイルド	2016
そらまめくんのベッド	作・絵：なかやみわ	福音館書店	1999
はじめてのおつかい	作：筒井頼子 絵：林 明子	福音館書店	1977
もったいないばあさん	作：真珠まりこ	講談社	2004
わにさんどきつ はいしゃさんどきつ	作：五味太郎	偕成社	1984

#### (1) 題材選定

本実践におけるパネルシアターの題材は、8グループがそれぞれ異なる絵本を選定した。その際に意識したことを表2に、子どもたちに伝えたかったこと表3にそれぞれ整理し、まとめた。

表2より、学生は「子どもにとって親しみやすいこと」を第一の基準としつつ、「教育的意義」と「演出可能性」を加味して題材を選定していたことが分かる。また、表3より題材選定の背景には「子どもが楽しむ」ことを越えて、「人間関係の形成」「生活習慣の理解」「感情への気づき」といった教育的意図が見出された。

表2 題材選びで意識したこと

子どもにとっての親しみやすさや理解のしやすさ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが親しみやすく誰もが知っている絵本だから。</li> <li>・内容が簡単で伝わりやすいものにした。</li> <li>・子どもたちにとって、身近なもの、想像しやすいものを取り入れることでより興味を持ってみてくれると思った。</li> </ul>
キャラクターや題材の魅力
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが親しみやすい動物が登場する内容にした。</li> <li>・子どもに分かりやすく親しみやすいキャラクター。</li> </ul>
教育的メッセージ性
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちがパネルシアターを通して考えたり、学んだりできる素材を選ぶようにした。</li> <li>・子どもへのメッセージ性のある絵本にした。</li> </ul>
表現方法や演出の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のグループとは違う本を入れることやブラックシアターを使うことで、ブラックシアターの表現の仕方などを自分たちが学べると思った。</li> </ul>

表3 子どもたちに伝えたかったこと

人間関係の形成
<ul style="list-style-type: none"> <li>・優しさや感謝の大切さ。</li> <li>・挨拶することの大切さや大きな声は怖いものではないということ。</li> <li>・仲間と協力することの大切さ。</li> <li>・仲間がいるということは当たり前のことではなく、一人ひとり個性があるということ。</li> <li>・友達を思いやる心、譲り合う気持ち、物を共有する良さ。</li> </ul>
生活習慣の理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しいことにチャレンジすること。</li> <li>・遊びより歯を磨くことの大切さを伝える。</li> <li>・普段何気なくしていることが実はもったいないことなんだということに気づいてほしい。</li> </ul>
感情への気づき
<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜＝怖いと感じる子もいる中で、パネルと光で子どもたちの身近な物語を通して、夜は怖くないと伝えられた。</li> </ul>

以上のことから、学生による題材選定は、従来の読み聞かせ活動と同様に「親しみやすさ」や「分かりやすさ」を重視している点で共通していた。しかし同時に、「パネルシアター」という手法を活用することを前提に、演出効果や子どもへの理解促進に意識が向けられていることが特徴的であった。特に「ブラックシアター」など新たな表現方法を試みる姿勢は、学生自身の学習課題ともなっていた。

また、子どもに伝えたい意図には、単なる娯楽性ではなく、協力・感謝・挑戦・規範意識など、発達段階に応じた価値観や態度の育成を目指す姿勢が確認できた。教員が教育的意図を持って題材選定を行うことについて指導したことで、保育者を志す学生が具体的な教育的意図をグ

ループごとに内包させようとする実践的志向を示すものであると考えられる。

## (2) 絵人形の製作過程

絵人形の製作については、各グループが成員間で共通理解すべき点について確認したうえで製作を開始した。共通理解すべき点としては、前出の「教育的意義」や「演出可能性」などのことであり、題材選定の段階で本活動の意義として踏まえていたことを念頭に取り組むということである。具体的には「発達段階に応じた価値観や態度の育成を目指す姿勢」や、いかにつくることで見やすく分かりやすい、楽しい表現となるか考えながらつくるという実践的なことなどを互いの目標として見失わないことである。これらの活動上の留意点の共有については、製作活動に入る前の事前指導の中で「製作における具体としてはいかなることに留意すべきか」という検討の時間をもち確認したことであるが、日常の授業時の製作や実技では、往々にして個人的な趣味に走ってしまったり我見にとらわれて活動過程での検討を疎かにしがちであったりする。よって、これは子ども本位に製作が進められるかどうかを見るためにも必要なステップであったが、その後の製作活動においてはそれらのことを踏まえて取り組んだ興味深い工夫が様々に見られた。また、「子どもと表現（造形）」担当者として学生に対して試みたいことがあり、絵人形には何らかの可動部分を設けて動く絵人形をつくってみるという共通課題も与えることにした。なぜなら、絵人形に可動部分があることで、製作そのもののみならず、演じる際にもさらなる工夫が必要となり、表現や試行の幅も広がるであろうと考えたからである。このようにして取り組んだ絵人形製作の完成後にまとめた各自の振り返りを基に、学生の思いと製作活動とのつながりを見てみたい。

この活動過程での振り返りを書く際には、工夫したことと反省点を書くように大まかに指示し、前述の通り、学生個々の振り返りを求めた。それは、グループとして目標を一にしても作業としては個々に行うものであり、感覚として捉えたことは個別的な表現の方が記述しやすいからである。そうしたこともあって、併せて観点を限定し過ぎないように考慮したが、それらは次のように分類した。即ち、面白く、楽しく、美しく仕上げるなど、造形的な工夫についての「美的観点」、子どもにとって見やすく分かりやすいものになるようにした視覚的な工夫についての「子どもへの配慮の観点」、絵人形をパネルに付けたり取ったりする際に演じやすくする操作性の工夫についての「操作性の観点」、そして、これらに当てはまらない「その他」、「反省点」の計5点であるが、特に前の3点は、パネルシアターの製作においては不可欠な留意点であろう。

本稿では、いずれの振り返りも上記の観点到って表4～6のようにまとめ、それぞれの表中には代表的な記述を抜粋して挙げているが、その中でさらにいくつかの観点別に内容を分けている。

表 4 美的観点からの工夫

<p>1. 形や配色、描き方や色の塗り方の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・緑を塗る時に絵の具のあるそのままの色だと納得がいかず色々混ぜて作った。</li> <li>・P ペーパーを切るとき、線に沿って綺麗な蝶々に見えるように工夫した。</li> <li>・絵の具の色が単色だと少し絵本の色と違いが出るので、白を混ぜたりなど2色以上を混ぜて色を作って塗った。</li> <li>・色も水っぽくならないように原色で工夫しました。</li> <li>・塗るときは水の量の使い分けに気をつけました。</li> <li>・出来れば色むらにならないように、絵の具を濃い目で作り、塗った。月や星空を少しリアルになるように色々な色を混ぜた。</li> <li>・色ムラができないようにできるだけ途中で色を足して作らないようにした。</li> <li>・登場する P ペーパーの色は協力して同じ色で塗った。</li> <li>・綺麗に絵の具を塗り、美しさを表現した。</li> <li>・グリーンピース兄弟をそれぞれ違う緑色で塗った。</li> <li>・星の輪郭線をなくすことで、空に浮かぶ星を表現した。</li> <li>・木の輪郭線を太く描いて立体的に見えるようにした。</li> <li>・クレヨン少し、横幅を大きく、シャーペンのお兄さんはシャープにした。</li> <li>・絵だけで見た目の感触がわかるように、わたの部分の色塗りのタッチを変えてふわふわ感をつくりました。</li> <li>・朝の風景を明るい色と暗い色で日が昇る様子を表現した。</li> <li>・パネルの色使いや素材の工夫をした。カラフルで目に入りやすく見やすい色を使い興味を引くように作った。</li> <li>・登場人物が2人だったので表情を目で表すために目を何個もつくって表現できた。</li> <li>・フクロウの目を P ペーパーではなく、動く目のシールにして面白さと可愛さを工夫した。</li> <li>・うずらの大きさを目一杯大きくし、特別感を出した。</li> <li>・顔などが違った形にならないように、同じ位置に描くなど工夫した。</li> <li>・おばあちゃんの顔を複数作って違いを出した。</li> <li>・おばあさんの手が飛び出ているように見えるように大きく作った。</li> <li>・色々な表情のおばあさんや男の子を作り、飽きないパネルシアターになるようにした。</li> </ul>
<p>2. 構造・仕掛け・キャラクターの動きの工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おばあさんの体が動くように顔と体で分けて作った。</li> <li>・ひざ頭を上にするか下にするかの重なり方についてこだわり自然に見えるようにした。</li> <li>・P ペーパーの裏面を上手く使い、場面によって裏を向けたりできるように工夫することができた。</li> <li>・ホタルの光っている部分をみせたり隠したりするために羽を動かせるようにして面白さを出した。</li> <li>・クレヨンの箱からクレヨンが出てくるように見せたかったため、P ペーパーを重ねて工夫した。</li> <li>・おじさんが落ちる場面を面白く興味が出るように糸で繋げて工夫した。</li> <li>・一つ一つの動物に、耳や足を割りピンで動きをつけた。</li> <li>・キャラクターの表情を最低でも2種類作り、変化させられるようにした。</li> <li>・主人公の手足が動くように手足を別で作った。</li> <li>・わにと歯医者のおじさんの手と足を割りピンを付けて動かせるようにした。</li> <li>・動きをつけてわかりやすいように手足や顔、口などを動くようにし、仕掛けをつけた。</li> <li>・動きのあることが多い絵本なので人間のようになくさんの関節を動かせるようにした。</li> </ul>

3. 背景・大きさなどの構成・空間の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなの作っているものと大きさを合わせるために、パネルに合わせたり<u>みんなと大きさを確認しあったりした</u>。小さすぎないため、大きすぎないため。</li> <li>・形を作る時、パネルに実際に置いてみて大きさを確認してから切った。</li> <li>・パネルが等間隔に配置できるように、<u>遠目から見て調整するなどの確認</u>ができた。</li> <li>・動物によってパネルの大きさに違いをつけた。</li> <li>・人物の大きさは主人公を基準として大小を考えた。</li> <li>・絵本が星の話だから、パネルを黒にすることで<u>夜空を表現した</u>。</li> <li>・歯医者の家とイスを大きく作って、サイズに合わせた。</li> <li>・校長先生の優しさが伝わるように、温かみのある色で背景を工夫した。</li> <li>・出来るだけパネルに貼った時に、<u>白い部分が多くならないように絵を大きくした</u>。</li> <li>・パネルを一面きっちり使えるように、<u>登場人物を大きめに描いた</u>。</li> </ul>
4. 絵柄・世界観の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の<u>世界観を崩さないように絵柄や色を似せた</u>。</li> <li>・絵本によせた絵にするのではなく、<u>自分達で考えて登場人物、物を作った</u>。</li> </ul>
5. その他 細部・技術的な工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・P ペーパーに描き、それを切る時に線ギリギリではなくて、<u>少し隙間を開けることで黒線（輪郭線）を強調</u>させることができた。</li> <li>・印象を和らげるためにP ペーパーの余白を作った。</li> <li>・細かい機械の部分も絵の機械とまったく一緒にするために細かいところも<u>諦めずに作った</u>。</li> <li>・相談しながら、絵柄を合わせ、<u>似た絵を描くようにした</u>。</li> <li>・黒以外の<u>髪色が多くなってきた世の中で髪色に変化</u>をつけた。</li> </ul>

※できる限り原文掲載に努めているが、明らかな誤字脱字は訂正するなど一部の記述は改変してある。

「美的観点」は、学生たち自身の満足や固有の感性に関わる部分でもあるが、一般的には子ども向けの絵に対しては丁寧かつイメージが明晰で濁りが少ないことが求められる。また、表4とも関連する留意点だが、学生は事前に幼児の視覚特性についても学んでいるため、例えば、子どもにとって分かりやすい色彩の選択や輪郭線の明示を自らの目標としている記述も見られる。また、つくることの楽しさもあってか、この観点に関する記述が内容の多様さや数のうえで最も多かった。

ここで注目すべきことは、通常の実技では絵の具の濃度などあまり気にしなかった学生たちが、不織布の絵人形の材質に対して絵の具がどのように染みていくかを見ながら水加減などにこだわっていたところだ。この観点に関してはほとんどの学生が何らかのこだわりを書き残しており、好ましい結果だったといえる。絵の具を濃く調整するのは、鑑賞者となる子どもたちへの配慮も含むが、色の選択については個々の学生のいわば“センス”



図1 色彩調合の様子

の見せどころでもあり、確かに学生たちの美的感性が発揮されていたと見てよいだろう。図1は、ブラックライトとブラックパネルを使用し暗闇に映える表現を追求する学生の色彩調合の様子だが、樹木を暗闇でも可視化するため、樹木の基本色である茶色に蛍光色を混ぜてみるという試みに取り組んでいる様子である。普段はこうしたこだわりをあまり見せない学生だが、子どもたちに演じて見せるという前提がここまで試行錯誤を促しているものと推定される。

同様の問題としては、輪郭線だが、子どもにとって図がはっきりと見えるのは輪郭線がある図である。しかし、日頃の授業で絵を描く学生はほとんどが輪郭線を必要とし、これが描けないと形に対して不安を感じる傾向が日常的に見られる。だからこそ、輪郭線を丁寧に描こうとする姿勢や、逆に表現効果を高めるために「星の輪郭線をなくすことで、空に浮かぶ星を表現した」学生の決断には製作への積極性と発想力の高まりを見ることができるのである。製作への積極性と発想力の高まりとしては、「シャーペンのお兄さんはシャープに」したり、「絵だけで見た目の感触がわかるように、わたの部分の色塗りのタッチを変えてふわふわ感」を表現しようとしたり、登場人物の個性や事物の質感の表現にまでこだわろうとする過程が見られ、「特別感」「飽きのこない」という記述からも成果物を子どもたちに披露することを我が事の楽しみとして取り組む思いが伝わってくる。

美的観点の形や色彩に関する記述からだけでも、すでに「他者を想定して保育の表現領域の実技に取り組み、実際に鑑賞者として相対する幼児・児童・保護者に向けて演じること」の学習効果を感じるが、続けて「構造・仕掛け・キャラクターの動きの工夫」について述べたい。これについては、「可動部分をつくること」を学習課題とし、必ず製作の中に取り入れることとしたため、全てのグループがこれに取り組んでいる。そうした理由としては、保育・教育の現場には、子どもが何らかの「機構」に触れられる教材や実践が少なく、簡単な機構を持つおもちゃ作りやそうしたおもちゃでの遊びが不足しているという問題意識からであり、また、絵人形であれ何であれ、意表を突く変化のある表現を見ることは子どもにとっては例外なく楽しいからである。本活動では、図2のように針と糸で縫い付ける方法と割りピンで接合するという方法の2つを基本技法として指導した。

この製作での学生たちのアイデアには興味深いものも見られ、表4の2に挙げた「ホタルの光っている部分を見せたり隠したりするために」可動部分を設けた工夫は、日頃からアニメーションに親しんでいる子どもたちからすればページをめくって様子が変わる絵本のホタル以上に楽しい変化であろう。他にも不織布の大きな「わに」が割りピンによって大口を開けるという演出も迫力があって楽しい仕掛けだった。学生たちが考案した可動部分による仕掛けは多くが動きを表現するためのもの



図2 可動部分製作の様子

と、一時的に何かを秘匿し出現させるという変化を見せるためのものである。どちらも子どもたちが最も好む仕掛けであり、後者については「いない いない ばあり」という絵本の大ベストセラーの存在がその証左である。

次は、背景との関係性を考慮することにもなる大きさや空間への意識が表されたものである。本稿の冒頭で「幼児には製作が難しく保育者でなければ作り得ない部分が多い」と述べたが、その最たることが前出の仕掛けをつくることであったり、この図と地（背景）の関係性の考慮であったりする。普段の造形活動では図と地（背景）を検討するという細やかさはなかなか期待できるものではない。学生といえども、気を抜けば幼児さながらに図の羅列となってしまうものである。しかし、本製作においてはパネルという支持体において絵人形がどのように映えるかという意識の働きも各グループに見られた。このこととグループ内の了解の下に活動を進めようとする意識も相働いて、「みんなと大きさを確認しあったりした」という記述に至っている。また、「遠目から見て」という記述があるが、作品から距離を置いて眺めてみるという検討の仕方も積極的な態度であることが必要であり、「校長先生の優しさが伝わるように、温かみのある色で背景を工夫した」に至っては、背景を活かして登場人物の性格・印象の表現を強化しようというこだわり方である。

続く「世界観」に関する記述にも学生の個々の検討が垣間見られて面白い。というのは、どのグループも選定した絵本を参照し、表現の土台としているが、できるだけ忠実であろうとするグループと積極的に改変していこうとするグループの2つの主張が見られたのだ。

筆者は、これは保育の現場でも検討すべき事柄であると考え、歴史のあるいは絵本が著された当時の事物について絵本を通して知るといった伝統文化の継承の問題と、物語などを通じて学ぶ主題の理解の問題は時として衝突するであろうと考える。主題については普遍的で現在の子どもたちにも分かるはずなのに、目にする登場人物や事物などが親しみのないものであると、視覚の違和感が子どもの注意を強く引いて主題の理解を妨げるということはあるだろう。そうした場合、出版年の古い絵本をそのまま子どもたちに見せることよりも、保育者が現代風にアレンジした方が分かりやすくなり、教育的な効果が高まることも考えられる。だからこそ、逆に意識的に絵本に忠実であろうとすることにも重要な意味が様々に見出だせるはずであり、重要なのは教材を無批判に漫然とつくってはならないということだ。そのような自覚的意識が学生に見られたということは事後の学習成果の共有にとっても喜ばしいことだと思う。図3は、登場人物をゲームなどのキャラクターデザインに近付けてみた例である。これをつくった学生



図3 現代風アレンジの一例

は、絵人形は意図的に現代風にアレンジし、四肢が可動である仕組みを持つが、脚の構造は膝頭を上にしてつなげることに留意したことで見た目の自然な感じを出したと述べていた。

最後に、「その他」の中で興味深いのは、絵人形に施す余白の部分である。絵人形をパネル上で取ったり貼ったりする際に、手指が絵そのものにかからないようにする見せ方の工夫として設ける場合が多い中で、絵人形の印象を和らげるために余白を施すのだそう。余白は絵人形の主たる要素ではなく、さほどこだわる必要のないものと思われがちな部分だが、ここにも印象を左右する何かを感じ取った学生の繊細な感性を見た。同欄の記述にある「絵柄を合わせ」や、現代の一般人に普及している髪色に合わせた登場人物の髪色の変更なども、細やかに製作に取り組んでいる表れともいえる。パネルシアターの特質として藤田（2013）は、「演じる者と観客との息づかいの交換まで含んだ、五感を総動員した関係。こうしたトータルな関係のなかでしか、伝わらないものがある（p.192）」と指摘しているが、絵人形をつくる過程でも形や色に繊細な感性を働かせることで、「五感を総動員した」子どもが見入ってくれるのであろう。

表5 子どもへの配慮の観点

1. サイズの検討やイメージの強調など視認性の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・パネルに貼った時に、見やすい大きさにするために下書きを書く際、パネルの大きさに合わせた。</li> <li>・子どもが遠くからでも見やすいように、<u>パネルに貼ってみて大きさを確認しながら下絵を描いた。</u></li> <li>・子どもに見やすい色をたくさん使うことで、<u>パネルシアターが楽しめるようにした。</u></li> <li>・ボードに何度かおためしでひっつけて、<u>どのくらいの大きさが見えやすいかを考えながらキャラクターなども作った。</u></li> <li>・小さいと分かりづらいと思うので、<u>少し大きめに色を濃くすることを意識しました</u></li> <li>・遠くから見ても見やすいようにパネルシアターの台<b>い</b>っぱいの大きさにしました。Pペーパーを2、3枚繋げて作りました。</li> <li>・(小さな)主人公が分かりやすいように<u>他のキャラ(大人)とほとんど一緒くらいの大きさで作った。</u></li> <li>・小道具を作る時に小道具だからと小さくせずに見やすいように大きめに作った。</li> <li>・牛乳やタバコなど、<u>普段小さいものを大きくした。</u></li> <li>・遠くからでも見えるようにキャラクターや小道具を大きめに作った。</li> <li>・登場人物を大きくつくり存在感が出るようにしてわかりやすくした。</li> <li>・木の大きさが始め小さくて、それを作り直して子どもたちが見やすいサイズにした。</li> <li>・ペープサート(※絵人形のこと)に描かれた絵がわかりやすいように、<u>縁をマジックペンで強調させた。</u></li> <li>・色が隣同士になって遠くから見た時に色が繋がって見えないように輪郭線をつけた。</li> <li>・絵の具でマイネームの縁が隠れてしまったが、乾いた後にもう一度縁をなぞり直し、見やすいようにした。</li> <li>・どの年齢の子でもわかりやすくするために使う色はカラフルに、原色に近い色を使うようにしました。</li> <li>・ムラにならないように原色+1色のみではっきりとした色を使用した。</li> <li>・絵本が長いので、<u>登場人物の数を少し減らすことで1つのものに集中でき、色はどうするべきかを考えることができた。</u></li> <li>・遠くから見ても見やすいように、<u>絵の具をできるだけ、濃い色で塗るようにした。</u></li> <li>・子どもたちが見やすいように明るくて、はっきりとした色を使った。</li> <li>・木の色を塗る時、茶色と金色を混ぜることによってブラックシアターで光るように色を工夫した。</li> <li>・色は子どもたちに見やすくするために、<u>星を光らせたり、単色ではなく混ぜて作って塗ったりした。</u></li> </ul>

## 2. キャラクター・事物・それらの表情の工夫

- ・主人公のおじいさんといじわるじいさんに違いが分かるように主人公は笑顔で少しふくよかにし、いじわるじいさんは細身で吊り目にした。
- ・ねずみが穴から歌っているシーンが分かりやすくなるように、音符をつくり、色をグラデーションにした。
- ・最後、いじわるじいさんがモグラに変わってしまうため、モグラがいじわるじいさんと分かるように、特徴的な目や歯の表情を同じにした。
- ・登場人物の性格や人柄がわかるように表情や色使いを工夫した。
- ・星座を表現したかったから、星を作ったあとに、毛糸を使って星が繋がっている部分を表現することができた。
- ・表情が伝わるようにイラストをはっきり描いた。
- ・豆の種類が多いので形と大きさと色が全部違うようにしてわかりやすくした
- ・星の大きさを2つに分けることで、星の大きさは1つじゃないということを表現し、また交互に置くことで実際の星のように再現できた。
- ・登場人物は少ないけど、目がそれぞれの場面で違うから、沢山の種類の目を作った。
- ・子どもの見た事のある山や動物を作った。
- ・絵本には、ゆりみみたいな花が載っていたけれど、それを作るのではなく、子供たちがわかるチューリップに変更した。
- ・登場人物を多く作るのではなく、物語に集中できるよう少なくした。
- ・月は黄色くせず、わざと銀色を塗ることで、月の濃淡を表すことが出来、目立ちすぎないようにした。
- ・くまの明るい時の顔を、グラデーションにした。理由は、目や口がはっきりするよう、明るい表情が分かりやすいようにするためだ。
- ・登場人物の絵を現代風にアレンジすることで子どもたちに親近感が湧くようにした。
- ・Pペーパーで草や小判、つづらなどを作る時に奥行きが出たりよりリアルに見え、親しむことができるよう複数色を作り実際どのように見えるかを考え塗り工夫した。

## 3. 構成・演出の工夫

- ・題名を作った。分かりやすく、内容が入ってくるように。
- ・大切なセリフは可視化できるように吹き出し付きで作成した。
- ・背景をシンプルにして、より見やすさやキャラクターが埋もれないように気を付けた。
- ・小判が出てくる際ナレーションで「ザクザク大判小判が出てくる」という表現があるため、小判を数枚糸で繋ぎ分かりやすいように工夫した。
- ・動くようにしたのがあるが、おばあさんを動かすことで、よりインパクトが強くなった。

※できる限り原文掲載に努めているが、明らかな誤字脱字は訂正するなど一部の記述は改変してある。

本稿が上梓された後で大学祭が催される予定だが、個人やグループの趣味とも鑑賞者への配慮とも受け取れる「美的観点」に比べて、「子どもへの配慮の観点」は、子どもを中心とした鑑賞者を想定して他者意識の下に製作が進められているかを測る指標ともなる。ここでも、学生たちは想像力を働かせて細やかな配慮のポイントを捉えられている。

まずは基本的な事項として視覚的に見やすい、分かりやすいパネルシアターとなるよう心掛けられているかということだが、絵人形の大きさに留意するという点に関してはどのグループも考慮してつくることができている。何より、演じて見せる際にフロア後方から観る子どもも想定して、小道具など小さなものも大きくつくるという配慮を考えついている点は好ましいアイデアであろう。他には、子どもが主人公なのだが、大人と同じサイズでつくすることで、主人公が見やす

くなるであろうと考えた工夫もあった。見やすさということであれば、この「大きさ」、そして、「輪郭線」の明示や補修、「色彩」の明瞭さなどが考慮された。

しかし、むしろ筆者が関心を寄せたのが、登場人物の個性の表現を工夫することによる“見分けやすさ”への配慮である。「表情が伝わるように」などと記述したグループが多かったが、登場人物に合わせて「ふくよかさ」や「特徴的な目や歯」を表すことで登場人物が簡単に見分けられるようにすることは、おはなしの進行がスムーズに分かってもらえるかどうかにかかる問題でもある。他にも、絵本のストーリー展開に支障がないと考えられる範囲で事物を変更して、親しみが持てる場面にしようとする試みや、題名、吹き出し、音符の補足などを考案して文字や記号を併用することでストーリーの理解を支援してみるなど、さきの世界観の問題とも重なるが、自覚的実践的に製作に取り組む学生の姿勢がうかがえるのである。

表 6 演じるための操作性の観点・その他

<p>1. 手に取って動かすための持ちやすさや絵人形のパーツが脱落しないための工夫など</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毛糸を付けるために、ボンドを使ったけど、ボンドだけでは、取れやすそうだったので、<u>その上からテープを貼り、強度をつけた。</u></li> <li>・腕を広げることで<u>貼りやすく裏表を使えるように工夫しました。</u></li> <li>・細かい部分のパーツが多かったから茎をあらかじめ木に貼ったり、取り貼りできる大きさに工夫した。</li> <li>・取ったりつけたりするときに手でキャラクターが被らないようにキャラクターの周りに余白をつけた</li> <li>・少し形を大きめに作り、持ちやすいように作った。星空はバラバラだと貼り付ける時に時間がかかるため、星と空は一緒に書いて1枚でできるように工夫した。</li> <li>・大きいPペーパーをパネルの上で繋げるのが難しかったため、<u>テープで止めて繋げて一回でパネルに貼れるようにしました。</u></li> <li>・Pペーパーを重ねる時は<u>貼り付けられるように後ろに白いフェルトを貼るようにした。</u>パネルのどこに貼るかによって白いフェルトの位置を変えた。</li> </ul>
<p>2. スムーズな演出のためのその他の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水色と青色、黄緑と緑など似た色があると演じる方が大変なためどっちかに決めた。</li> <li>・体の外側に切り込みを入れて腕の可動域を広げて動きやすくした。</li> <li>・パネル上で分かりやすいようにペーパーサート(絵人形)の裏に番号を書いた。</li> <li>・キャラクターの目を多くの種類作った為、どの時にどの目を使用するのかが分かるように番号と順番を書いた。</li> <li>・位置をしっかりと定めるために<u>パネルに取り付けて位置を定めることをした。</u></li> <li>・顔だけ表情を変えたパーツを作り、(ボディの部分を)張り替えなくてよいようにした。</li> <li>・おじいさんが穴に落ちるシーンを<u>分かりやすく表現するために、顔・上半身・下半身で分けて描き、糸でつなげ動くようにした。</u></li> <li>・話の流れに合わせて背景の絵を取り替えられるようにした。</li> <li>・Pペーパーの後ろに<u>隠す場面があるため隠した時にはみ出さないか大きさを確認しながら制作した。</u></li> </ul>
<p>3. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵を切る人、絵の具を塗る人と役割分担をして<u>スムーズに作業することが出来た。</u></li> <li>・<u>同じ登場人物を塗る時は、多めに絵の具を塗る。</u></li> </ul>

※できる限り原文掲載に努めているが、明らかな誤字脱字は訂正するなど一部の記述は改変してある。

操作性については上記の表4、5ほど重要な事ではないが、流れるような演出で子どもたちを

作品世界に誘うためには疎かにできない事項ではある。

ここでは、主に絵人形を持ちやすくするためにどのような形にするか、バラバラにつくってしまった絵人形をまとめて動かす必要がある際にどのような工夫で解決できるか、そして、多数の絵人形を間違えることなく順番に登場、あるいは退場させられるかという演技上の工夫と、やはり、多数の絵人形を迷わず間違えることなくすべてつくり得る計画や点検の工夫などが記されていた。しかし、絵本の内容によっては大変多くの絵人形が必要となって、後段の反省点として挙げざるを得ないほどに大変であったということもやむを得ないことである。

表7 反省点

<p>1. 色・塗りに関する反省・工夫</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・朝日の表現をするために、グラデーションで表現したけど、1番くらいところを黒にすれば良かったと思った。</li><li>・全てに蛍光塗料を使ってしまい、光らせないところも蛍光になってしまったのが反省。</li><li>・試し塗りをせずに塗ってしまい思っていた色と違う時があった。</li><li>・色を塗る時に服の色とズボンの色や肌の色と服の色が混ざってしまった。黒とピンクなど、混ざると濁る色が混ざってしまった。</li><li>・色を塗る時に少しはみ出でてしまったこと。メンバーで役割を分担してできた。</li><li>・私が担当したグリーンピース兄弟が所々色むらができてしまい、もう少し丁寧に塗ったら良かったと思った。</li><li>・適当に塗っている部分があって他の部分と重なってしまった。</li><li>・絵の具で色を作り下に敷いている新聞紙で色を確認したが実際Pペーパーに塗ると濃かったりイメージ通りにならない事もあったため、Pペーパーで確認することが大切だと気づいた。</li></ul>
<p>2. サイズ・形・配置に関する反省</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・一部のパーツが思っていたより大きくなってしまい、サイズ感がおかしくなってしまった。</li><li>・花火をマッキーと色塗りをしたけど大きさが同じだったので大きさが違う花火を2つ作っても良かったかなと思いました。</li><li>・Pペーパーの上にPペーパーを重ねるところが何箇所もあり、台の上に乗らずに落ちてしまいがちでした。</li></ul>
<p>3. 構造・技術的な工夫や課題</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・顔がとれやすい。</li><li>・Pペーパーが表裏逆になってしまっているものもあった。</li><li>・細かいパーツが多く、覚えるのが難しくなってしまった。もう少しまとめるほうが良かった。</li></ul>
<p>4. 絵本・台本との整合性に関する反省</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・絵本の内容を見ずに作り出してしまったため、絵本の内容がとても薄かった。反省。</li><li>・絵本を最初しか確認しておらず、後になってから作らないといけないものが2つほどあったこと。</li></ul>
<p>5. 作業の段取り・役割分担に関する反省</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ただ、バラバラになってしまうこともあり難しかった。誰が貼るのかをちゃんと考えるべきだと思った。</li><li>・作るものを何度も忘れていて、作っては気づいてを繰り返していた。</li><li>・貼る時が楽になるよう、小物を（バラバラにつくらずまとめて）1つにしてパネルを作ったら良かった。</li><li>・段取りが悪く、足りないものを後から作ってしまった。</li></ul>

・目をつくりすぎてどの場面でどの目かが分からなくなってしまった。

※できる限り原文掲載に努めているが、明らかな誤字脱字は訂正するなど一部の記述は改変してある。

最後の「反省点」については、表4から6にかけて学生たちが努力してきた諸々の事柄も、もちろんすべてが順調だったのではなかったということを見せてくれる。しかし、努力への自負と反省による自戒が共に学生の振り返りに現れたというのは学習指導上重要な事である。つまりは、学生の自己評価として、萎縮したり慢心に陥ったりという偏りは好ましくないということである。

それはさておき、修練の賜物としての技能に左右される問題は、学生たちにとっては気づきの容易なことであろう。むしろ、事前の内容確認の大切さや計画性の大切さに気づく経験ができたことの方が、パネルシアターに取り組んだ最も大きな学習成果といって善いのではないだろうか。例えば、「絵本の内容を見ずに作り出してしまったため、絵本の内容がとても薄かった」という反省は、現場ではあってはならないことであり、今回のような機会に挽回してより善い発表につながる経験を積むべきである。「目をつくりすぎてどの場面でどの目かが分からなくなってしまった」というのも、起こりがちな事態ではあるが、こうなってしまっただけは徒労感が大きくなってしまふので計画や活動過程での点検の大切さを再認識してほしい。

絵人形の製作過程については、総じて工夫が生かされ、複数の留意点を同時に意識しながら作ろうとする実践的な態度も見られたことは本稿の冒頭に述べた期待に沿うものであったといえるのではないだろうか。反省点にも挙げられていた計画ミスの挽回などに時間を要したものの、各グループの作品の完成度としては上々の仕上がりにあつたといえよう。個別の優れた工夫については今後共有の機会を持って、全員の学びとしていきたい。ただし、前述のように各グループともに絵人形が相当な数にのぼるため、演じる際には改めて工夫する必要に迫られるであろうと予想する。

### (3) 台本作り

絵人形が完成する頃に台本作りを行い、実際に演じることをイメージし、各グループでストーリーの流れや場面展開、個々の動きを想定しながらナレーションや台詞を考える作業を行った。台本作りに関して学生が工夫した点を表8に示す。すべてのグループが絵本を基にして絵人形を作っているが、各絵本の表現方法が台本作りに影響し、内容によって工夫する点が異なると考えられたため、学生の振り返りから題材ごとに工夫点を抽出して整理した。

表 8 台本作りの工夫

題材名	工夫した点
おむすびころりん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な絵本を組み合わせた台本</li> <li>・場面や起承転結が分かりやすい台詞</li> <li>・登場人物に合わせた台詞</li> <li>・状況が伝わりやすいナレーション</li> </ul>
くまのこうちょうせんせい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもに伝わりやすい言葉</li> <li>・台詞の分担や場面展開が分かりやすくなるように作成</li> <li>・相手に様子が伝わるような声の大きさやトーン</li> </ul>
くれよんのくろくん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入からおはなしに入る言葉かけ</li> <li>・素早くパネルの対応ができるような登場人物とナレーションの役割分担</li> <li>・絵本の内容を分かりやすくするための登場人物の数の調整</li> </ul>
さわってごらん！よるの星	<ul style="list-style-type: none"> <li>・想像しやすい間のとり方</li> <li>・物語（暗闇の世界）に入り込める言葉かけ</li> <li>・感情を込める箇所など読み方のポイントの整理</li> </ul>
そらまめくんのベッド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵人形の操作と話す人の分担</li> <li>・絵本の世界観を壊さないような内容の表現</li> <li>・大事なところは数名で台詞を言うなど声の強弱</li> </ul>
はじめてのおつかい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の内容を忠実に進められるような表現</li> <li>・伝わりづらい表現の変更や省略</li> </ul>
もったいないばあさん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達への問いかけ</li> <li>・会話を楽しめる構成</li> </ul>
わにさんどきっ はいしゃさんどきっ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本の内容が伝わるようなナレーションの追加</li> <li>・状況の補足説明</li> </ul>

物語や絵本の展開をどのようにパネルシアターで表現するのか各グループで検討していく中で、絵本の内容をできるだけ忠実に再現しつつも、場면을省略しながら作成しているグループがほとんどであった。また、登場人物の数や背景の複雑さが絵本によって異なるため、補足するナレーションを追加したり、伝わりづらい表現を変更したりする工夫を行っていた。ブラックライトを使用するグループは、電気を暗くするタイミングと言葉かけを検討し、暗闇の世界に入り込める展開になるようにしていた。このように、道具を活用することで出てきた工夫点もある。他に、子どもとのやりとりを楽しむ問いかけや、強調したい部分の声の強弱に関する記述が見られた。さらに、絵人形の操作と台詞の役割分担を行うといったグループ活動をすることで可能となる点も見られた。これらのことから、台本作りの過程において、学生が子どもへの伝わりやすさを第一に考えて取り組んでいたことが分かった。しかしながら、実演する際には台本通りに進めることが難しいと予想され、練習や発表を通して台本を再考することで更なる気づきが得られると考えられる。

#### (4) 発表

半期の活動のまとめとして、製作したパネルシアターのグループ発表会を実施した。7/8に各グループで練習し、7/15に発表であった。発表直後にパネルシアター活動の全般的な個人の振り返り、7/22にグループとしての振り返りを行った。グループの振り返りの内容を中心に、各グループで考えたグループ発表の評価や他グループの発表を観た後での気づきについて考察する。

グループ発表の評価は、1. 人数に合わせた適切な役割分担ができたか、2. 絵人形を動かす動作（パネル板上の使い方）が適切にできたか、3. 声色や声量を適切に表現できたか、4. 上演が円滑に進められたかの4点を4段階で尋ねた。表9は、グループで考えた評価をまとめたものである。

表9 グループ発表の評価

	できた	少しできた	あまりできなかった	できなかった
適切な役割分担	8	0	0	0
絵人形を動かす動作	1	4	3	0
声色や声量の表現	4	3	1	0
円滑に進められたか	2	2	3	1

人数に合わせた適切な役割分担に関しては、全グループができたと回答していた。グループ人数（3～5名）に合わせて、絵人形を動かす役、ナレーションを読む役など、それぞれで考えた分担案が発表時に機能していたと推察する。声色や声量の表現に関しても、4グループができた、3グループが少しできたと回答しており、多くのグループが手応えを感じていたのではないだろうか。絵人形を動かす動作に関しては、4グループが少しできた、3グループがあまりできなかったと回答している。また、上演が円滑に進められたかに関しても、3グループがあまりできなかった、1グループができなかったと回答しており、これらの結果から、パネル板を使った練習がもっと必要であったと考える。8グループに対してシアター台が4セットしかなかったため、練習の際は時間を指定し、2グループで1つのシアター台を使用していた。練習環境の充実を今後の課題としたい。

表10 他グループの工夫に対する学生の意見

1. 演出や視覚的な工夫
・ 絵人形が大きく見やすかった点
・ ブラックライトの活用
・ 背景があるとステージに奥行きが出る
・ 最初にタイトルを貼るとわかりやすい
・ Pペーパー同士が貼り付けられるようにしていた

2. 台詞や声の表現上の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・声を大きくする</li> <li>・台詞や登場人物で声のトーンを変える</li> <li>・場面によっては複数で台詞を言う</li> </ul>
3. 絵人形や役割分担の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵を出すタイミングをスムーズにする</li> <li>・パネルの貼り替えがスムーズだったところ</li> <li>・読む役と次のパネルを準備する役とパネルを貼る役をきちんと役割分担をしているグループがスムーズに発表できていたので、役割をわけることを取り入れたい</li> </ul>
4. 発表の構成（流れ）の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入に手遊びを入れていたグループがあり、世界観に入りやすくなっていた</li> <li>・ナレーションを取り入れることで伝わりやすくなる</li> <li>・話の途中に観ている人たちへの問いかけを入れて、一緒に楽しむことができた点</li> </ul>

表 10 は、他グループの発表を観た気づきから自分たちの発表に取り入れたい他グループの工夫についてまとめたものである。演出や視覚的な工夫、台詞や声の表現上の工夫、絵人形や役割分担の工夫、発表の構成（流れ）の工夫の 4 つに整理できた。保育者や表現者の視点で他グループの発表を肯定的に捉え、自分達の発表になかった表現上の工夫や具体的な改善案などが得られたのではないだろうか。これらの学びが次の発表機会に活かされてほしいと考える。

#### 4. ま と め

大学祭に来場する幼児・児童に対してパネルシアターを演じるために、学生が自ら内容を構想し、製作し、発表する一連の行程を複数教員で観察し、題材選定、絵人形の製作過程、台本作り、発表の 4 つの視点で学生の活動過程を考察した。各過程で創意工夫や保育者としての意識が見られ、製作が難しく実践する上でも複数タスクがあるパネルシアターを題材としたことでの学びや気づきも得られたのではないだろうか。また鑑賞者を意識することで、全般的に、学生が強い目的意識をもって取り組み、協働性や積極的な授業参加が見られたと考える。

2 学期は約 1 ヶ月の準備期間を経て、大学祭で子どもを中心とした来場者に向けて発表予定である。子どもたちの前で実践をするにあたり、演出として BGM や効果音を入れたり、発表前後に遊べるゲームコーナーも併設予定である。大学祭の発表を経た学生の学びや気づきについても考察していきたい。

子どもたちに楽しんでもらうためには、学生自身が楽しみながら主体的に活動に取り組むことも大切であると考え。引き続き、教員や保育者を目指す学生が実践を通して総合的に学ぶ機会を検討していきたい。

## 注

- 1) 松谷みよ子の文で綴られる絵本「いない いない ばあ」は1967年に童心社から発行され、今日では累計約700万部を誇る。全ページに渡って、様々な登場人物が「いないいない」と顔を両手で隠し、続いて「ばあ」と正体を明かす展開が繰り返される。本書については知育や情緒的な発達に欠かせない効果が数多く指摘されている。

## 引用・参考文献

- 藤田佳子（2013）パネルシアターの歴史（1）～創始者古宇田亮順とパネルシアター～，淑徳短期大学研究紀要，第52号，p181-196
- 藤田佳子・松家まきこ・松原健司（2015）パネルシアターの活用方法と今後の展望，淑徳大学紀要 国際経営・文化研究，20巻，1号，p.233-246

## 題材として選定した絵本

- 松谷みよ子・長野ヒデ子（2006）『おむすびころりん』童心社
- こんのひとみ・いもとようこ（2004）『くまのこうちょうせんせい』金の星社
- なかやみわ（2001）『くれよんのくろくん』童心社
- クリスティマシソン・大友剛（2016）『さわってごらん！よるの星』ひさかたチャイルド
- なかやみわ（1999）『そらまめくんのベッド』福音館書店
- 筒井頼子・林明子（1977）『はじめてのおつかい』福音館書店
- 真珠まりこ（2004）『もったいないばあさん』講談社
- 五味太郎（1984）『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』偕成社

---

〔おおのぎ たかゆき 美術教育〕  
〔なかの けいこ 音楽教育学〕  
〔くろぎ あき 保育学〕  
〔やまさき まさし 体育科教育・安全教育〕